

『平勤休農』のライフスタイルが日本の未来を幸福にする

西村豊 一般社団法人都市生活者の農力向上委員会代表理事



にしむら・ゆたか
1960年東京都生まれ。早稲田大学社会科学部卒業後、そうデパート勤務を経て起業。耕作放棄地再生の提言や「平勤休農キャンペーン」の展開など、農村と都市を結ぶ各種活動続ける。

耕作放棄地問題を、都市住民の力を借りながら解決しようという運動を始められたそうですね。

農業の恩恵にもっとも浴しているのは、消費する側に立つ都会のわたしたちです。命の糧を生産してくれている農村の問題に無関心であっていいはずはありません。日本の農業は、耕作放棄地に限らず、さまざまな課題を抱えています。たとえば食料自給率は40%弱。カロリーベースの話ですが、それを支えているのは農業や化学肥料、ガソリンや重油です。これらの原料はすべて化石資源で、輸入品。日本のエ

ネルギー自給率はたった4%でしかありません。

安全保障の視点でも、農業やエネルギーについて考える必要がありますね。

安い原料を輸入し、卓越した技術で加工し、有利な条件で輸出するのが日本の稼ぎ方でしたが、このビジネスモデルは20年以上も前に崩壊しています。それでも過去の成功が忘れられず、大量生産と大量消費が改められなかった。農業もこうした工業化の恩恵を多大に受けてきましたが、国家間の力学の変化や度重なる金融ショックで、日本経済も農業も翻弄されています。

大量生産と大量消費の先にあるのは大量廃棄。わたしたち消費者も、こうした経済モデルが作った環境破壊サイクルの加担者です。状況を変えるには、自然の摂理に立ち返る必要があります。

一人一人が土に触れる時間を持つことで、社会が歩むべき方向を見いだそうということですか。

伝統的な農村の暮らしには、社会システムのように通じる賢い知恵が詰まっています。経済成長に頼れない時代だからこそ、そこに学ぶべきソ連が崩壊して経済が混乱したとき、ロシアの人たちが飢えずにすんだのは

ダーチャという家庭菜園を持っていたからでした。ソ連崩壊のおおりで石油や化学肥料の供給が絶たれたキューバでは、都市住民も総出で有機農業に取り組み、食料危機から脱しました。

サラリーマンにとって最大の不安は職を失うことです。しかし、近郊農村と縁を持ち、作物を育てる技術を身に付けていれば、仮に失業しても食うに困ることはないでしょう。

都市に暮らしていても、土につながっていれば安心が得られる。そうした考えを広めるためにわたしたちが企画したのが「農力検定」で

す。そのテキストにもある記述なのですが、人類は誕生以来50万世代を狩猟採集民として生き、その後の6000世代を農民として暮らしてきました。しかし、化石資源に依存する近代農業の歴史はたった2世代です。未来の生き方のヒントは、最近の2世代ではなく、その前の6000世代にわたって受け継がれてきた、自給と共生の知恵の中にあるのだと思うのです。

もともと農は生命を維持するための基本技術でした。種をまき、水を与え、穀物や野菜を育てることは、ある時代までは世界じゅうの誰もが身に付けていた生き残りの術だったはずなんです。

一人でも多くの人たちに、地球の未来を幸福な社会、命の本質について考えてほしい。それには体験の場も必要です。検定の次のステップとして注目したのが都市農村交流です。

まずは都心から1時間ぐらいの農

家を応援しようというキャンペーンを始めました。じつは東京の通勤圏内にも耕作放棄地は多いんですよ。

都心から1時間ぐらいの場所という条件には、意味がありますか。

わたしもこれまでさまざまな援農イベントに参加しましたが、あまり居住地から遠いと長続きしないんです。最初は楽しくても往復には時間もお金もかかります。応援したい思いはあっても、だんだん負担に感じてくる。単発イベントで終わってしまっただけでは意味がありません。近い場所なら通いやすいので、息の長い取り組みが可能だろうと考えたのです。

都市住民の農的体験といえは、市民農園がたいへんな人気です。

市民農園もさまざまな気づきを与えてくれる場ですが、わたしたちは、趣味で終わることなく、都市近郊の耕作放棄地復元のように、取り組みの中心にたがいのメリットと社会的意義が見

える活動が必要だと考えました。耕作を放棄したとはいえ、知らない人に土地を貸すのは不安だというのが農家の心理ではないでしょうか。

いまやろうとしているのは、地域に根づいた活動を続け、信用を得ているNPOなどに地元農家との仲介役になってもらうことです。趣味と社会貢献を兼ねて土に触れたいという人を巻き込み、耕作放棄地をふたたび農地に戻そうというプロジェクトです。

最初はお試的な実習で、その後継続可能な人には、その実習に自主性が反映されるよう徐々に運営を委ねる。農地法との関わりがあるので、耕作権の貸し借りではなく、NPOの活動範囲に収まるよう配慮します。

できれば、個人ではなくチームがよいと思っています。農作業は自然のリズムに合わせなければなりません。都会で働いている個人の場合、なかなか手が回らない。チームで代わることが

る行けば畑の手入れも維持されます。NPOが間に入ることで、地元の人たちから協力を得ることも可能でしょう。

潜在的なニーズはありますか？

耕作放棄地を所有する農家のなかには、手が回らないのでお金を払って業者に草刈りを依頼している家もあります。一方、市民農園の人気の高まるとともに、土を耕すことで社会貢献もしたいという「ソーシャル・カルチャー」が芽生えている。土に触れることは生き方を見直すひとときになると考える人も多くなってきました。

こうした人たちに、休日、都市近郊の農業地域に来て楽しんでもらう。このライフスタイルを、わたしたちは「平勤休農」と名づけました。また園藝作業を含めた取り組み全体を「リカルチベーション」と呼んでいます。この言葉には畑をふたたび耕すという意味だけでなく、社会自体をもういちど耕そう、という思いが込められています。



上/「東京で畑おこし」を合言葉に耕作放棄地の再生に取り組んでいるティーズ・クリエイティブ・ファクトリー (<http://t-scf.com/>)の農作業現場。西村さんらの活動仲間だ。下/園藝作業で美しくよみがえった耕作放棄地。土に触れる場は都市生活者の癒やしの場となるだけでなく、生き方そのものを振り返る場にもなる。



7月に発行された「農力検定テキスト」
コモンズ 1,785円(税込み)
●農力検定の問い合わせ先
ホームページ
「りかるち:農力向上委員会」
<http://reculti.org/>
フェイスブックグループ
「平勤休農キャンペーン」
<http://www.facebook.com/groups/kyunou/>